



同志社人物誌 (16)

市原盛宏

田中良一

略歴

市原は、いうまでもなく熊本バンドの一人で、後年朝鮮銀行総裁となった。明治十二（一八七九）年六月同志社英学校余科卒業と同時に、同僚から推され、新島先生から選ばれて同志社幹事となり、母校経営の衝に当った。同時に西京第一公会の仮牧師、更に第二公会：現同志社教会：仮牧師を兼ね、殊に明

治十七（一八八四）年の新島先生外遊のときはその留守を預る等、新島先生の片腕どころか両脚であった。

明治十九年は、外遊から帰学の新島先生を迎えて同志社がようやく活動期に入らんとするときに、煉瓦建の礼拝堂や図書館：現有終館：が献堂せられ、外に向かつては仙台に同志社の分校ともいうべき東華学校ができた。

東華学校は、新島先生の東北伝道の基地であ

る。校長には総督級の人物を送らねばならぬ。選ばれたのは市原で、十九年九月赴任した。

ここでの市原の活動を知り得る史料が欠けているが、市原は校長在任中明治二十二（一八八九）年エール大学に留学し、経済学を専攻し、在学中新島先生の死に遇い、二十五年 Ph.D. の学位を得、欧洲を視察して帰国した。留学中東華学校が閉鎖されたので同志社大学の前身政法学校に教授として迎えられ、更に教頭小野英二郎（後の日本興業銀行総裁）に代って教頭となった。次いで翌二十六（一八九三）年には、新島先生のとを嗣いで同志社々長の任に在った同僚小崎弘道が外遊したので留守中社長代理をつとめた。

しかし市原は留学前、東華学校在職中、己が使命は教育界に無く、むしろ実業界に在ると考え、このことを当時福島に伝道中の友人綱島佳吉に相談している。かくて市原の考えは漸次熟し、遂に明治二十八（一八九五）年に到って、当時の日本銀行総裁川田小一郎に識られて同志社を去った。これも四年後の三十二年三月には時の総裁山本達雄と合わず辞職した。

この頃渋沢栄一に識られていたので、三カ

月後の同年六月第一銀行に入り累進して横浜支店長となり、渋沢と共に欧米を廻って帰国した。外遊中横浜市長が空位となり、渋沢の了解もあつたので乞われて三十六年市長となり、貿易振興のため港湾改修に着手し、市営事業の収益増進による市債償還計画の確立等、積極策を実施し、三十九年五月に到った。

市長在任中、第一銀行では韓国における業務拡張のため、人物を要することになり、渋沢は再び市原を招き入れ、第一銀行取締役兼韓国総支店支配人とし、第一銀行に課せられた韓国の通貨整理と幣制改革の重責を市原に担当させた。この整理一段落と共に明治四十二（一九〇九）年韓国銀行が設立され、従来第一銀行の持っていた中央銀行としての権限一切がそれに譲られ、市原は総裁となり、次いで四十三年、朝鮮銀行設立と共に総裁となり、大正四（一九一五）年病を押して東奔西走中十月四日遂に永眠した。享年五八。従五位勲三等に叙せられ、東京雑司ヶ谷墓地に葬られた。

夫人鐘（かね）は、安中藩の老職江場氏の女。昭和十八年三月五日、八十八歳で永眠した。当主を市原（和田）興男氏という同志社

校友で、夫人和子は孫女である。

出自・教養・才幹

市原は阿蘇大宮司の家臣村上直七と妻美哉の長男として安政五（一八五八）年四月五日阿蘇の宮地に生まれた。幼名を牛彦といい早くから同地の市原喜平太の養嗣子となり、元服して、大宮司阿蘇惟治から盛宏と命名された。家は貧しかった。阿蘇家の家臣約二百家中の上席に在ったが禄高は僅かに数石と伝えられる。したがって、饑頭屋という副業があった。中世以前の阿蘇家は阿蘇の国の祭政の統領として中部九州一円を領したが、近世には四囲の武士に侵略せられ極めて僅かの神領を維持するに過ぎず、したがって家臣の生活は臥薪嘗胆に似て阿蘇独特の反骨精神が育ったと言える。市原の実母は市原が急逝のとき八十を越えて健在したが、徳富、綱島らの伝えるところによると信仰に徹した女丈夫であった由で、この母の貧苦のうちに於ける庭訓が市原をふるい起たせたせる原泉の一つであったことは疑い無い。

市原は少年時代大宮司家の漢学塾に入り、陽明学者本島四郎や大宮司惟治の感化を受

け、かつ大宮司家の世嗣惟敦の補導をした。熊本洋学校入学は明治五（一八七二）年でジエーンズから大いに信頼された。最近発見のシェーンズ手稿の回想録「KUMAMOTO」を見ると、山崎為徳と市原の兩人が大きく浮ぶ。また徳富猪一郎は回顧して「通暢の英語、能達雄弁、輪旋の材能」と評しているが、市原の語学は有名で、その故に渋沢を始め中央政財界の名士に存在を識られたといつてよい。その英語の基礎は既に熊本洋学校時代にできあがっていた。英語のみならず、キリスト教を通じ、近代々をも既に身につけていた。

洋学校では一般教養科目を修めているから、同志社では英学校余科と称するグラジュエートスクールの神学校に入り、新島先生は無論、デヴィス、ラーネッド、ゴールドンらの指導を受けた。卒業式に市原の行った記念演説は「真正の教育」と題し、一国の盛衰を決定するものはまず教育で、富国強兵文明開化は枝葉であることを強調し、何が真正の教育であるかをキリスト教の立場から論じたもので、明治十年代の日本に対しては警醒的主張として価値が高い。同志社では無論ラーネッ

ドから神学と共に経済原論の講義を聴いたが、ラーネツドの母校エール大学で研究した経済学は後年金融経済界に雄飛する下地となつた。

徳富はまた市原を評して「小心翼々」と言い、韓国在住日本財界人は「もつと大胆にやれ」と言っているが、これは事務家、銀行家の手堅さ、安全率を踏み責任を重んずる態度を誤評したもので、この手堅さが渋沢の信用を博し、伊藤統監、寺内総督の信用を得たのである。市原に同志社政法学校教頭の席を譲つた小野英二郎は「豁達、透明……事に臨んで周到なる注意をなし、之を実行するや剛毅なる胆力を以てす」といつているが、この評は当を得ていると思う。

新島先生の二ヵ月にわたる中国四国伝道旅行中、同志社では数名づつの小クラス二組を合併したところ、学生が反対して合併を白紙にかえせと当局に要求し、当局が拒否したのでストライキとなり、帰学せられた新島先生は両者の間に立ち、自ら掌を打つて事件を落着させられたが、このとき学生の要求を頑としはねつけた当局は市原と森田久万人で、学生の背後には徳富がいた。「小心翼々」どこ

ろか「剛毅なる胆力」の所有者であつた。

教育界

市原が主管した筈の明治十二年以後は無論同志社創立当初から市原の仙台赴任までの同志社事務所の文書記録は今日失われて見当らない。わずかに最近始めて見ることを得た新島先生手許の自筆記録「同志社記事」なる小記録による以外史料は無い。この記録には新島先生によく御厄介をかけたような派手な人物は散見するが、市原の名は七年間に三回記録されているだけで、しかもその稀なケースは重要事件のみである。これは新島先生が平素市原の行為については全く安心して万事を任せておられたからと解してよい。新島先生はよく旅行せられる。たまには山野を跋渉されるが多くは伝道と募金旅行である。市原在任の七年間、概算二六二一日のうち、新島先生不在で市原が森田久万人と共に留守を守つた日数は一一七四日に及んでいる。ただしこの間六四八日は外遊であるが、この数字を見ても市原の隠れた努力が同志社の椽の下にかく多く積まれたかを察することができ。初期の同志社では教育と伝道は一つのもの

であつた。市原が同志社経営の幹事でありながら、教会の仮牧師を兼ねたことも述べた。しかしここに一つ追記せねばならぬことは、市原は教会員の信仰維持にも経営者の頭脳をはたらかせた。すなわち教会員を小人教づつ分つて組を編成し、この組内でお互に主に在る交わりをさせることを考えた。それが明治十六年で、同志社教会ではこの制度の実施につき反対もあり、議論を聞かせたが結局これを実行することになった。今日の組合の始まりである。

実業界

日本銀行歴代総裁中、最も傑出した総裁は第三代の川田小一郎であるといわれている。明治二十二年総裁になったが、在任中各方面から人物を集めた。外務省、民間、大学卒業生として同志社から市原盛宏を招いた。市原は入行するや学識と企画の優秀さによって重用されるが、明治三十二（一八九九）年、山本達雄総裁下の内訌の際、理事四人のうち三人、局長七人のうち五人、支店長四人のうち三人までが山本と合わず辞表を提出した。市原もその一人であつた。

日銀を退くや三ヵ月後に渋沢に招かれ第一

銀行に入り、ここでも才幹をあらわして累進するが、最も大きな仕事は、韓国の幣制改革であった。韓国が通貨整理、幣制改革に乗り出したのは明治三十八（一九〇五）年で、第一銀行がこの整理事務の委託を受け、そのことに当たったのが市原であった。言うまでもないことながら、李朝の末期には質造紙幣の濫発、私鑄質造貨幣が多く、流通経済を害することがおびただしかった。この整理改革に、市原は五ヵ年かかり、これを明治四十二（一九〇九）年七月に完了した。そこで朝鮮銀行の前身韓国銀行が発足し、第一銀行は中央銀行の性格をこれに譲ったが、市原はこのときを期し勇退を決意した。ところが伊藤統監が市原を見込み、新設の韓国銀行総裁に就任を懇請したのでその乞いを容れた。このとき市原は第一銀行と韓国銀行との間に立ち、業務の受授をしたが問題が色々あり、市原のよいうな清廉潔白の士でないといふことは無事進行しなかっただろうと伝えられている。

このようにして明治四十四年日韓合併と共に韓国銀行は朝鮮銀行となり、市原は引続いて総裁に就任し、朝鮮の産業開発に資金面で

積極策を実施した。当時朝鮮と内地との貿易収支は朝鮮側の輸入超過となり、そのため金利を引上げて購買力を抑えよとの主張の多い中に在って市原は自信満々低金利策を押し進めて産業開発を促進した。更に農業改良に融資して農産の振興をはかった。ことに綿絲布市場の開発に異常なまでの関心を示した。朝鮮の綿花栽培は、同志社出身の釜山府尹若松兎三郎が庄司乙吉（後の東洋紡社長）の協力を得て大阪府河内の綿の種を移植したのが始まりで朝鮮全土に綿が普及することになった。したがって右の若松と同志社の関係を通じて何らかの関連があり、両者の間には徳富が介在したと思われる。

朝鮮銀行は発足と同時に五ヵ年は政府の補助を受けうることになっていたが、市原の積極策が功を奏し、一ヵ年補助を受けたのみで自立し、大正四（一九一五）年市原永眠のときは多額の内部積立金を保有した。朝鮮銀行史の示す数字は、大正三年下半期末には法定準備金を別として損失補填準備金と配当平均準備金だけでも合計三十万三千五百円の内部積立金を留保して健全営業を貫いている。

むすび

つまるところ市原の人となりは、阿蘇特有の反骨精神が賢母の庭訓、阿蘇を支配した陽明学派の教育、ジェーンズと新島先生を通じて得た清教徒的開拓精神と信仰などによって成長、これにニュートン・グラントの大学に得た自由主義経済学と社会学の教養が磨かれて成立ったものと思える。しかも社会へ出ると、彼をよく用いる大人物が次々と待ち構えていた。日銀総裁川田、第一銀行頭取渋沢、朝鮮統監伊藤、朝鮮総督寺内など何れも日本の近代史上第一流の人物である。川田によって宏く眼をひらいた市原は渋沢のバックにより韓国の幣制改革を遂行し、きわめて地味ながら「偉大」と称してよい功績を半島民のために残した。市原は何れの職場でも開拓者的存在であった。まず基本を培ったうえで猛然と積極策に出ている。同志社卒業に当って「真正の教育」を論じ、基本を培うことを主張したきわめて純度の高い精神主義が彼の経済政策に具体化した姿を見ることが出来る。しよせん市原はジェーンズの門弟であり新島先生の門人であった。

（社史史料編纂所購託）